

ヒメヒカゲの観察記録

立岩幸雄

はじめに

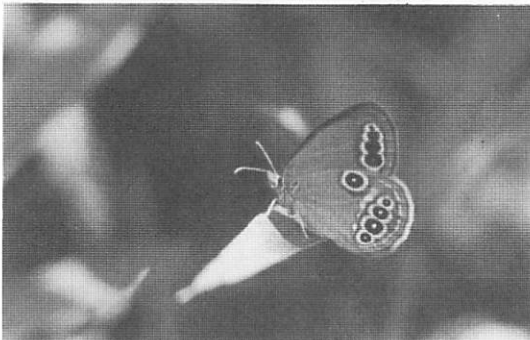
加古川市内某所で観察したヒメヒカゲについて報告する。ヒメヒカゲはオオウラギンヒョウモン、ヒョウモンモドキ、ウスイロヒョウモンモドキ、オオルリシジミ、ミヤマシジミ、シルビアシジミなど草原性の蝶と同様、全国的には急激にその数を減らしているといわれているが、兵庫県播磨地方各地の生息地においては環境が保たれているせいか、まだ健在である。発生域の広さ、発生数とも、全国的に見て現在では最も密度の濃い生息地であろうと思われる。昨年、成虫の発生時期である5月末から7月はじめにかけて観察した結果を報告する。

観察地の概要

加古川市内北部の標高130mの丘のふもとの東側斜面である。自生している植物としては、マツ、サカキ、ツツジ類、ヤマモモなどであるがいずれも疎らにしかはえておらず、しかも高さ2m以下の低木である。地表近くではヒメヒカゲの食草であるスゲ類、カヤツリグサ類、ルリタテハの食草であるサルトリイバラが茂っているが地表むき出しの箇所も多くある。またモウセンゴケの一種やイシモチソウといった食虫植物も見られることから酸性土壌であると考えられ、この影響で高木が自生しない環境を形成していると考えられる。一般的な印象としては明るい乾燥草原である。

観察エリア

観察エリアの広さは50m×50m、100m×200mの2ヵ所とした。場所の選定根拠は比較的成虫の密度が



イネ科植物の葉上に止まるヒメヒカゲ

濃かったこと、歩行が容易であったことである。観察はこのエリア内に一定の歩行ルートを設定して、そのルート上で行った。

観察期間

5月27日の初見にはじまり、3頭まで目撃数が減った7月1日までの36日間である。一昨年の初見日も5月28日であったことから当地においては例年5月末には成虫が現れると考えられる。

観察記録

観察日、天候、観察開始時間、観察時間、目撃数、その他、を表1に示す。

観察日については1週間以上間隔を空けないように心掛けた。観察開始時間については毎回一定の時間が望ましいとは承知しながらも、結果的にはランダムな時間になってしまった。観察時間は毎回おおむね30分程度としたが、30分より時間がかかっている日はより詳しく調査しているのではなく、写真撮影に費やした時間が加算されているためである。目撃数については選定した歩行ルート上で確認した概算数を示しており、エリア内の発生数の全てを網羅したものではない。また6月11日に観察エリア内で採集者2人を見かけ、この採集によって発生数のカウントに影響を受けたと思われるが、影響の大きさは不明である。♂、♀、計の目撃数を縦軸に、日の経過を横軸に、結果を図1のグラフに示す。これから判断できることは♂と♀の発生のピークに約10日間のずれがあること。累積発生数は♂、♀ともほぼ同じか若干♀が少なめであることである。

活動

雨天及び極端な強風日以外は日の出から日没まで活動している。また雨天であっても、少しの止み間には翅の開閉を間欠的に行うが、ウラナミジャノメやヒメウラナミジャノメのように活発に行わない。ひとの気配を敏感に感じるらしく近づくと飛び立つことが多いが飛翔力は弱いため灌木の間や地表を“ピョンピョン”と飛び跳ねるように移動する。交尾については6月2日の早朝に1例と6月16日の午後12時に2例確認した。いずれも♀が上の状態で垂直な枝に止っていた。発生数からみて♂の破損個体が増える6

表1 ヒメヒカゲの観察記録

観察日	5月27日	5月28日	6月2日	6月4日	6月11日	6月16日	6月24日	7月1日
天気	雨	はれ	はれ	くもり	くもり	はれ	くもり	はれ
観察開始時間	14:00	14:10	7:00	16:05	14:45	16:00	10:15	5:00
観察時間(分)	30	30	40	60	45	30	30	30
目撃数	♂	5	10	26	約50	約40	約20	0
	♀	1	0	4	約10	約35	約50	約20
	計	6	10	30	約60	約75	約70	約20
その他			交尾1P 目撃	♂ 破損 はじま る	♂ ♀ 同 比率, クラ ナミシ+ノメ	♂ 全て 破損, ♀ 3割破損 交尾	♀ 全て 破損, シ +ノメ現る	シ+ノメ多 い

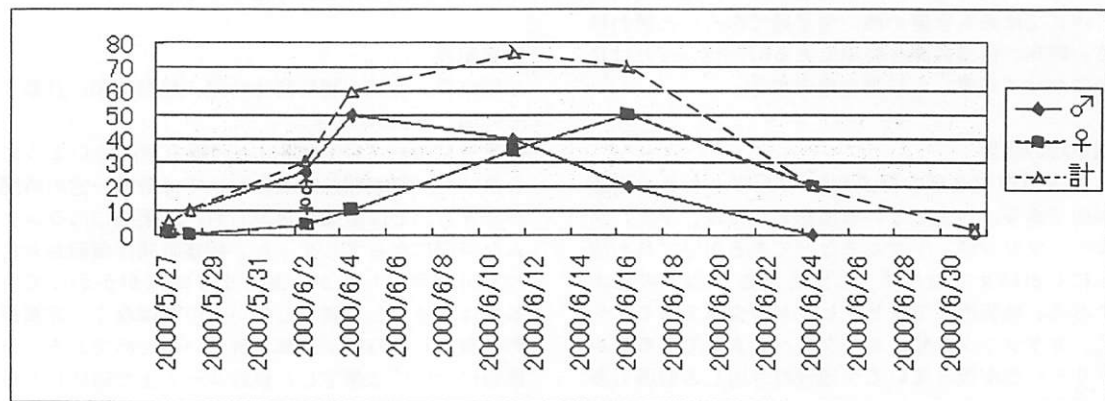
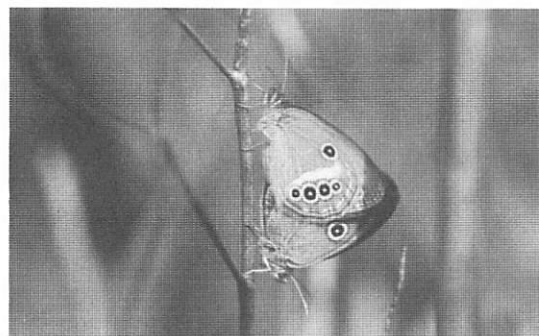


図1 ヒメヒカゲ性別別出現の時系列変化



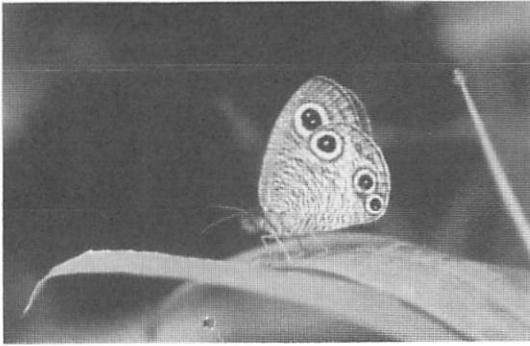
交尾するヒメヒカゲ

月10日ころから交尾個体が増えると考えられるが、一昨年に同じエリア内で5月30日に産卵場面を目撃しているの、♀は羽化後すぐ交尾し、すぐに産卵をはじめていると予想される。成虫の寿命は♂で10日前後、♀で2週間程度と思われる。やや♂が短いのは探雌行動で活発に飛びまわるためである。6月

11日にそれほど破損していない♂の個体が力尽きているのを2例目撃した。今回の観察中には訪花・吸蜜には出会わなかった。

ウラナミジャノメとの混生

ヒメヒカゲ生息地内の限られたエリアにウラナミジャノメを見ることができる。限られたエリアというよりは“点”のような非常に狭い場所である。このような場所は水脈が地表に露出しているところばかりである。これはウラナミジャノメの食草となっているスゲ類、カヤツリグサ類がヒメヒカゲのそれとは種類が違い、より親水性な種であることを物語っている。ウラナミジャノメの発生数についてはヒメヒカゲの10分の1以下、発生期間も3週間とヒメヒカゲよりやや短い。ウラナミジャノメが姿を消す時期からジャノメチョウが現れる。ウラナミジャノメと同時にヒメウラナミジャノメも発生しているが両者はあきらかに棲み分けており混飛することは



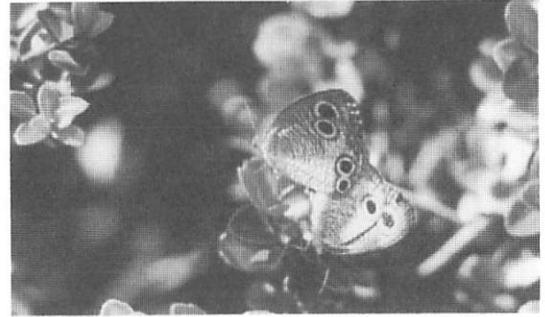
葉上に止まるウラナミジャノメ

ない。明るい草原にはウラナミジャノメ、暗いジメジメした陰性環境にヒメウラナミジャノメが生息している。両者の生息エリアの最短距離は50mもないところがある。当地のウラナミジャノメは第1化の発生しかみないようである。

おわりに

当エリアでヒメヒカゲの観察を行って昨年は2シ

ーズン目であった。あくまで成虫だけの観察であったが、観察地に通う回数が増えれば増えるほど新たな場面に出会うことが出来た。しかしながらその半面、新たな疑問も起こってきた。特に成虫以外の通年生態についておりをみて調査・観察したいと考えている。



交尾するウラナミジャノメ

(TATEIWA YUKIO 加古川市加古川町西河原97-7
サンロイヤル加古川リバーージュII 713)

雌岡山のギフチョウ

山口 福男

神戸市西区の雌岡山(メッコサン)の山頂にギフチョウが飛来することは神戸の蝶マニアの間では周知のことであるが、その数は多いと言えるものではない。私の経験では絶好の条件の日を選んで訪ねても必ず出会えるとは限らず、1頭でも見ることのできる確率は50%以下であった。この山のギフチョウのことを私が知ったのは1955年で吉坂道夫さんからの情報によるものであった。翌年(1956)教えられたとおりソメイヨシノの満開になるのを待って穏やかな晴天の日を選んで登山した。そして念願のギフチョウにはじめて出会うことができた。それからは取り付かれたように1991年まで、この山の頂上に祭られた神出神社詣でが続くことになった。途中4回の欠則があるものの32年分の記録が得られたのでここに報告する。

調査方法

4月上旬から中旬の間の1日を選び、午前11時か

ら12時までの間に山頂の境内に飛来する成虫を数えた。上記の方法ははじめからこのように計画したのではなく、何年か調査を続けているうちに自然に同じ方法に固定していたのであった。ギフチョウが山頂に飛来する日はソメイヨシノの開花と同調していて、いるとすれば開花期間中の穏やかな晴天日ならば間違いなく会うことができた。飛来が多いと1日だけの観察で満足できたので重ねて調査をしなかったが、少なかったり1頭も見ることができなかった年には始めの頃は何日か調査していたが結果は同じであったので、いつしか年に1回となった。観察の時刻と時間は、ギフチョウのことをあまり知らなかった頃は長時間粘っていたが、そのうち飛来し始めるのは午前11時前後で12時を過ぎると姿を見せなくなるのがわかってからは昼前の1時間だけ観察することにした。飛来数は多いときでも数分おきに1頭程度で、しかも通過するだけの個体が殆どであったので、1時間の間に見ることのできた数を集計